KONAN UNIVERSITY

自己愛の観点から見たSelf-esteemに関する一検討

著者	坂田 浩之
雑誌名	甲南大学学生相談室紀要
号	5
ページ	24-39
発行年	1998-02-28
URL	http://doi.org/10.14990/00003632

自己愛の観点からみたSelf-esteemに関する一検討

甲南大学学生相談室　坂田　浩之

Ⅰ　はじめに

生きている上で我々は、大なり小なりの挫折や失敗を避けられない。こうした挫折や失敗に直面した時、我々の自信は揺らぐが、それにもかかわらず、基本的には自らが価値のある存在であるという感覚をある程度安定して保てることが、積極性や創造性を支えると同時に、現実や自らの有限性を受け入れて、自己像や行動・思考の内的枠組みを修正することを可能にする。青年期は Erikson, E.H. によって、アイデンティティの確立と拡散との間の揺れが心理的発達上の重要なテーマとなる時期として位置づけられているが、その揺れのために、自己評価も定まりにくい時期であると考えられる。つまり、青年期において Self-esteem の問題が際立つと考えられる。本論文では、主に Kohut, H. の自己愛論の観点から、 Self-esteemについて検討する。

Ⅱ　問題

Ⅱ－1　Self-esteem 概念について

「Self-esteem 」という概念は、おおよそ「個人が自分自身に対して抱いている価値的感情」を意味するものだが、我が国において“自尊感情”“自己評価”“自己価値”“自己尊重”等さまざまな言葉で訳されていることに象徴されるように、用いる人によって、認知的－情動的、客観的－主観的といったスペクトラムの中で、微妙にとらえ方のニュアンスが変わってくる曖昧さの大きい概念であると言える。あるいは、認知的なものであると同時に情動的なものであり、客観的なものであると同時に主観的なものであるという、逆説を含んだものであると言えるかもしれない。そもそも、自分が自分を評価し、価値づけるという営み自体が、自分が主体と客体に分裂しているとも、自分が主体であると同時に客体であるとも言い表すことができるような、逆説を含んでいることを考えれば、Self-esteemという概念をがすっきりとしたものにならないのは当然であると言えば当然なのかもしれない。

また、先ほどの「自分が主体と客体に分裂している」という表現に示唆されるように、「自分」というものが単一のものとしてとらえ切れないところがあるという点も、Self-esteemの概念をとらえがたいものにしている背景的な事情のひとつとして挙げられる。「自分」というものが、それなりに統合されているとはいえ、いくつもの（互いに矛盾するところのある）側面を含んでおり、そうなると一個人に対して一つのSelf-esteemがあるとは言い切れず、複数ないし、多次元にわたるSelf-esteemの同時存在ということが考えられてくる。

Self-esteemの問題は、「自分とはいったい何者なのか」「自分が生きている意味は何なのか」といった根源的な問いと直結しており、Self-esteem の動揺は、心のまとまりや均衡に大きな波紋を投げかけることになりやすい。裏を返せば、Self-esteem の安定が、心のまとまりや均衡を維持するのを、基底において支えると言える。それゆえ、Maslow(1954)が指摘するように、Self-esteemを求めることは、人間の基本的な欲求となる。Self-esteemをテーマとした心理学的研究は数多く、心理臨床においても、Self-esteem の低さ（「自信がない」）や、Self-esteem の低下（「落ち込んでいる」）といったSelf-esteem の問題が、出会うことの多いテーマの一つとなっているのも、Self-esteem が人の心における重大事であること

の証左と言えるであろう。

質問紙法を用いた実証的な研究において、Self-esteem が高いということは、一般にはポジティブな指標と捉えられることが多いが、一方では高い自己評価が必ずしもポジティブな指標とならないことを指摘する研究もある。例えば、斎藤(1962)は、ロールシャッハテストによってはかられた自我機能の健全度と自己評価との間に直線的でなく、ある曲線型の対応関係が存在することを報告している。また、藤原・前田（1977）は極端に高い自己評価を示す人は、ロールシャッハテストの反応内容において否定的イメージの方が肯定的イメージよりも多いことを報告している。

これらの報告が示唆するのは、Self-esteemの高さが必ずしも人格の統合性の高さやその機能的健全さといったものと直接的に結びついていないということである。つまり、一口にSelf-esteem が高いと言っても、人格の統合性の高さやその機能的健全さという基盤を持つ場合と、そうした基盤を持たない場合があるということである。Self-esteem について研究する場合にはこのような事情に考慮する必要があると考えられる。

人格の統合性やその機能的健全さを基盤に持たずに高いSelf-esteem を示すという事態は、自己愛人格障害(narcissistic personality disorders)において特徴的に見ることができる。そこで、次節ではこの自己愛人格障害について述べる。

Ⅱ－2　Kohut の自己愛人格障害論の観点からみたSelf-esteem

「自己愛（narcissism)」という概念は、Freud の「ナルシシズム入門」以来、あいまいで、多義的なものであるが、概念の歴史の詳しい解説をすることは本論の主旨を超えている。Stolorow(1975)が、機能的な観点から、「心的活動は、その機能が自己表象の構造的な統合性、継時的な安定性、肯定的な情緒による潤色を維持するのに奉仕する程度において自己愛的である」と定義しているが、この自己愛の定義が、本論文における自己愛の概念を端的に言い表していると思われる。この定義によれば、Kohut が述べるように自己愛と対象関係は矛盾するものではなく、自己愛的な対象関係と呼べるものも考えることができる。

自己愛人格障害は、Kohut によると、「Self-esteem が非常に不安定で、特に失敗・失望・侮辱に対して極端に敏感」(Kohut&Wolf, 1978)であることが特徴であるとされる。しかし、「自己の分析」(1971)では、「自己愛人格障害をもつ患者の症状は…はっきりと規定しにくいもの」であり、一般的には、患者は当初、心が自己評価を調節したり正常な水準に維持したりすることができないという本質的な局面に焦点を当てることができず、せいぜい漠然とした抑うつ気分とか、仕事ができなくなるとか、倒錯的行動に向かう傾向というような二次的な症状を認知して述べる程度であるとされている。そして、このようなことが生じるのは、「眼は眼自身を観察することができない」ように、人格の中で障害をきたしている部分と自己観察機能の座が近いところにあるためとされる。

このようにKohut は、自己愛人格障害の本質的なところにSelf-esteem の障害を見るが、その障害の発生に、発達早期の対象関係の中での外傷的な自己愛の傷つき体験による自己愛的な心的構造（「自己 the self 」）の欠陥を想定する。そもそも、Kohut にとって「もともとの自己評価の源は、周囲の人々があなたに何をしてくれ、あなたのことをどのように思ってくれたかにある…後になってその人がもつ自分自身を愛する能力は、その起源となる自己愛的な関係の複製」(1987/Elson) なのである。

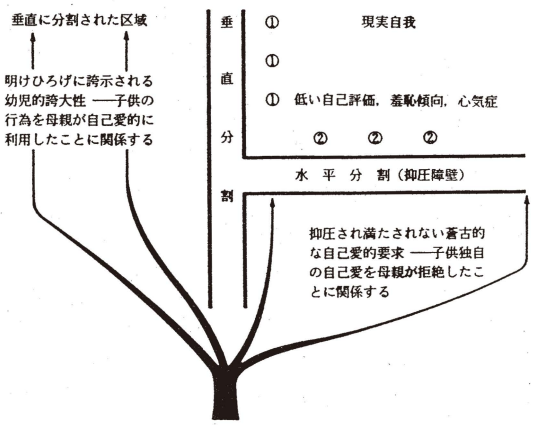
Kohut(1971) は、自己愛人格障害において見られる過大なSelf-esteem は、「誇大自己」と呼ばれる、原初的（Kohut は「蒼古的 archaic」という表現を好む）な心的構造のあらわれと見る。この誇大自己という心的構造は、子どもが、完全性と力を自己に集中することによって、そしてすべ

ての不完全さを割り当てた外界から侮蔑的に顔をそむけることによって、一次的な自己愛平衡を保存しようとする試みとして創造されると考えられている。そして、「好ましい環境のもとでは、（自分たちの誇大な空想の自己愛的－顕示的表現に親が共鳴し参加してほしいという子どもの欲求に対して、親が適切に選択して反応するような環境のもとでは）子供は自分の現実的限界を受け入れることを学び、そして彼らの誇大な空想や生のままの顕示性は放棄され、同時に…現実的な自己評価に置き換えられる」とされる。しかし、「もし誇大自己の最適な発達と統合が妨げられるなら、そのときはこの心的構造は、分割spritならびに／あるいは抑圧によって現実自我から隔離されるだろう。そのとき、この心的構造はもはや外界の影響を受けなくなり、蒼古的なかたちのまま保持される」。このような誇大自己の統合不全によって生じる自己愛人格障害は、その分割のあり方と症状・態度の現われ方によって、以下のような２つのグループに区別されている。

第１グループ：蒼古的な誇大自己が主として抑圧かつ／あるいは否定された状態にある人々が属する。ここでは心の水平分割が問題となるが、この水平分割は深いところにある自己愛エネルギーの源泉からくる自己愛栄養を現実自我から奪ってしまう。それゆえ、その症状は自己愛欠乏の症状である（自信の喪失、漠然とした抑うつ、仕事への熱意のなさ、自発性の欠如など）。

第２のグループ：多少とも修正されていない誇大自己が垂直分割によって心の現実的区域の範囲から排除されているような症例からなる。外に現れた患者の態度は一貫性に欠けている。一方では彼らは意識されてはいるが分割された誇大性によって、うぬぼれが強く誇りが高い。そして誇大自己の要求にもとづいて度を越した自己主張をする。他方では、彼らはパーソナリティの深部に埋もれて近寄りがたい（水平分割）、静かに抑圧されている誇大自己を隠しもっているがゆえに、第一のグループの患者と類似した症状や態度も示す。

ここでは、第２のグループの自己案人格障害が注目される。すなわち、このタイプでは、高いSelf-esteem の源となる誇大自己が人格の中心的な部分に統合されていないという点において、先述した、人格の統合性の高さを基盤とせずに高いSelf-esteem を示す人の人格構造の一つのモデルとなるだろう。また、第２のグループの自己愛人格障害における人格構造のモデルは図1-1 のように図示されるが、この図が端的に示すように、垂直分割の概念が提出されたことで、一個人の中に、複数のSelf-esteem が並列的に存在することが示唆されており、その点でも注目される。



図における矢印は自己愛エネルギー（顕示性と誇大性）の流れを表す、分析の最初の部分では、主な治療的努力は（否認によって維持されている）垂直の障壁を取り除くことに向けられる（①の印のところ）。かくて心の分割された区域の、これまで抑制されていなかった幼児的自己愛を現実自我が制御できるようになる。このようにして垂直に分割された区域（図の左側）への表出をさまたげられている自己愛エネルギーは、こんどは抑圧障壁（図の右側）に対する自己愛の圧力を強化する。分析の第二の部分では主な努力は（抑圧によって維持されている）水平の障壁を取り除くことに向けられる（②の印のところ）。それによって、現実自己のなかの自己表象はいまや自己愛エネルギーを供給されるようになり、低い自己評価と羞恥傾向と心気症が取り除かれる。これら低い自己評価と羞恥傾向と心気症は、現実自我が自己愛エネルギーを奪われていた間、この構造のなかで優勢だったのである。

図１－１　自己愛人格障害の人格構造のモデル
（Kohut, 1971）

Ⅱ－3　自己愛人格障害の治療的変化の観点からの検討

前節では、人格に十分に統合されていない自己愛を基盤としたSelf-esteem について、自己愛人格障害をモデルに検討してみたが、今度は統合性の高い人格を基盤としたSelf-esteem について、自己愛人格障害の分析において見られる治療的な変化をモデルとして考えてみたい。

Kohut(1971) は、自己愛人格障害の分析において徹底操作が進むと、「徐々に現実的な自己評価が増大し、成功の現実的な楽しみも増大する。そして、業績をなしとげるという空想を適度に利用すること（可能で現実的な行動計画の中にとけこませること）ができるようになる。さらにユーモア・共感・叡知・創造性といった複雑な発達の産物がパーソナリティの現実的区域のなかで成立するようになる」と述べている。また、自己の凝集性[1] が強化されることにより、二次的に自我機能が高まるとされ、「統一的な自己の体験は、自己イメージに安定した自己愛備給がなされる結果、自我が凝集して機能するための重要な前提条件であるといえる。対照的にそうした備給がないと自我機能の障害が起こりやすい」と述べている。

こうした特性は、統合性の高い人格を基盤としたSelf-esteem を特徴づけるものと考えることができるだろう。本論文ではこの中から、特に共感（empathy）についてとりあげてみたい。

Ⅱ－4　共感と自己愛の関連性について

Kohut（1965）は、共感能力の基盤は「我々の最早期の精神組織においては、母親の感情、行為、行動がわれわれの自己の中に包含されていたという事実にある。母親とのこの一次的共感 primary empathyは、他者の基本的な内的経験も、おおよそ、我々のものと似たものである、という認識を準備してくれる。他者の感情、願望、思考のあらわれの最初の知覚は、自己愛的な世界概念の枠組みの中で成立するのである」と述べている。したがって、「共感の使用（特に、長期にわたっての）の邪魔をする妨害物の中でも最たるものは、自己愛的な様式で他者とかかわることをめぐっての葛藤から由来する」。つまり、共感は、本来自己愛的なものであり、自己愛的な対象関係が保たれていないところでは生じないものであると言える。

また、Kohut（1971）によると、自己愛人格障害では、他人の欲求や感情に対する共感の欠如がしばしば見られるとされる。このことは、 Kohutの考えを敷衍するならば、自己愛人格障害では、自己愛的な機能を果たす心的構造の欠陥が大きく、その機能を代わりに遂行してくれる対象（自己対象）への欲求が非現実的なまでに過大で切迫したものであるために、自分の置かれた環境の中では、自己対象とのつながり、言い換えれば自己愛的な対象関係、を成立させるのが難しく、またそうした関係性の体験が破綻しやすい状態にあると考えられる。このような状況においては、自己愛的な対象関係を基盤とした共感は生じにくいし、Kohut（1971）の言うような「理解してもらえないとか正しく反応してもらえないとかいった外傷的失望から自分を守るために、距離をとるという工夫をして自分自身を取り囲んでしまう」というような事態も生じるであろう。反対に、正常な場合では、その人格における自己愛機能の高さから、対象への自己愛的欲求（自己対象欲求）が現実的で実現しやすいものになっているために、自分の置かれた環境の中で、自己愛的な関係性が保持されており、そのために他者への共感も可能になると考えられる。

このように共感性は、Self-esteem を安定して支える、人格の統合性やその自己愛的機能の高さ、求める自己愛的な対象関係のあり方と大きく関

[1]丸田（1982）によると、「凝集した（cohesive)」という言葉は、通常「団結した」とか「まとまりがある」とか集団の凝集性を示す。本論文における「人格の統合性」という言葉は「自己の凝集性」にほぼ対応するものとして用いられている。

わっている。このことから、共感性を調べることで、Self-esteem の基底にある人格の統合性やその自己愛的機能の高さを推測できると考えられる。

Ⅱ－5　アグレッションと自己愛の関連性について

前節では、自己愛的な対象関係と共感の関連性について検討したが、ここでは、自己愛的な対象関係が破綻したときの反応としてのアグレッションについて、Kohut の「自己愛性憤怒（narcissistic rage ）」の観点から検討してみたい。

Kohut （1977）においては、アグレッションは「原始的なものではあるが、心理的に一次的なものではなく、あくまで崩壊産物」であり、共感不全に対する二次的な反応であるとされる。このようなアグレッションの典型として、自己愛人格障害において見られる発作的な激しい怒りを「自己愛性憤怒」(Kohut,1971,1972)として概念化した。これによれば、自己愛性憤怒が生じるのは、「明らかに自己や対象がその能力への期待に応えることに失敗したときである。…すべての人は自己愛の傷つきに対して困惑や怒りで反応する傾向があるけれども、最も強烈な羞恥心や最も激しい形態の自己愛的怒りは、蒼古的環境に対する完全なコントロールの感覚を絶対的に必要としている人々に生じるのである。これは彼らでは自己評価や自己そのものの維持が、無条件に肯定的なミラーリングを与えてくれる自己対象や融合を許容してくれる理想化された自己対象に全面的に依存しているゆえである」。そこでは、誇大自己が自己の限界を認めようとせず、その失敗や弱さを、十分に援助してくれない蒼古的な自己対象の悪意や堕落のせいにする。自己愛性憤怒の特徴としては、「合理的な限界を単純に無視することや外傷の埋め合わせをする願望、復讐をやりとげる願望が認められる」ということを挙げている。また、後にKohut（1984）は、自己愛性憤怒と目標を阻止されたときの反応としての攻撃性を区別し、「前者は容赦のない憎しみと残忍性によって特徴づけられ、後者は敵対者を不必要に傷つけるという要求のないことによって、また問題の目標が達成されたときには完全に攻撃性がしずまることによって、特徴づけられる」と述べている。

このような自己愛性憤怒に近い形でアグレッションを表現する傾向性は、自己愛人格障害に近い心的布置をもつ、すなわち人格の統合性はそれほど高くないが、人格の中心部への統合度の低い比較的プリミティブな自己愛によって高いSelf-esteem をもつと考えられる人において多く見られると推測される。

Ⅲ　目的

ここまでKohut の自己愛理論に基づいて、Self-esteem 、共感、アグレッションについて論じてきたが、これらの理論的検討について実証的に調べてみたい。すなわち、高いSelf-esteem を示す人に関して、共感性から、Self-esteem の基底にある人格の統合性やその自己愛的機能の高さを推測し、対人的な葛藤状況におけるアグレッションの表現のあり方によって、その妥当性を調べる。

仮説としては、以下のことが考えられる。

共感性の高い人は、そのSelf-esteem の基盤に人格の統合性、自己愛的機能の高さがあり、対人葛藤によって自己愛が危機にさらされる状況で、自己愛的な欲求不満に陥りにくく、相手を不必要に傷つけるようなアグレッションの表現の仕方は少ないであろう。反対に、共感性の低い人の場合、その高いSelf-esteem は人格の中心部に十分に統合されてない比較的プリミティブな自己愛を基盤としたもので、人格の統合性や自己愛的機能はそれほど高くないため、対人的な葛藤状況において、自己愛的な欲求不満が生じやすく、その反応として、自己愛性憤怒に近い形でアグレッションを表現するだろう。

Ⅳ　方法

Ⅳ－1　調査対象

大学生（含短大生）157名（男性71名、女性86名）[1]。　範囲は18歳～25歳、平均年齢は20.8歳であった。

Ⅳ－2　調査時期　　1992年10月～11月

Ⅳ－3　調査用紙

①Self-esteem 尺度　斎藤（1959）及び菅(1975)を基礎に、筆者が修正と新たな項目を加えて作成したもので、自己の身体的、精神的、社会的特性に関する 45 項目の文章対で構成される。５件法。

②共感性尺度　加藤・高木(1980)によるMehrabian & Epstein（1972）の情動的共感性尺度の日本語版と、角田（1984）によるDavis （1983）の対人的反応指標（ＩＲＩ）の日本語版を基礎に、筆者か修正と新たな項目を加えて作成したもので、26項目からなる。５件法。

③Ｐ－Ｆスタディ　日本版Ｐ－Ｆスタディ青年用（三京房）を用いた。24のフラストレーション状況を描いた絵によって構成されている。すべて左側の人物が右側の人物に何らかの意味で不満を起こさせている場面になっており、被験者は右側の人が何と答えるかをフキダシに書き込むように求められる。

Ⅳ－4　手続き

三種類のテストを綴じた冊子を配布し、各自行ってもらうことにした。その際、順序効果を考慮して、あらかじめテストの順序をカウンターバランスしておき、前から順番に行ってもらうように教示した。また、Self-esteem 尺度と共感性尺度の項目は、ランダマイズしておいた。

Ⅳ－5　データの処理

①Self-esteem 尺度の採点及び項目の選択

各回答に対し、各項目毎に定められた方向に応じて、単純に５点から１点の得点を与えた。次に、各項目の得点と総得点との相関係数を算出し、 r<.30の４項目を削除し、残りの41項目を最終項目とした（表4-1)。クロンバックのα係数によって内的整合性を調べたところ、α=.92 と十分に高い値が得られた。そこで、最終項目における総得点を「Self-esteem 得点（以下ＳＥ得点と略記)」とした（理論上の範囲は41~205）ところ、被調査者全体で平均 131.2、ＳＤ 20.92であった。

②共感性尺度の採点及び項目の選択

ＳＥスケールと同様に採点し、各項目の得点と総得点との相関係数を算出し、 r<.30の５項目を削除し、残りの21項目を最終項目とした（表4-2)。α=.85 と十分に高い値が得られたので、最終項目における総得点を「共感性得点」とした（理論上の範囲は 21 ～105)ところ、被調査者全体で平均78.9、ＳＤ10.12 であった。

③ＳＥ得点及び共感性得点における上位群と下位群の選択

Self-esteem の高い人における共感性の高さによる、アグレッションの表現様式の違いを調べるために、Self-esteem と共感性の高さによって４群に分けた。その際、ＳＥ得点と共感性得点のそれぞれにおいて、平均値以上の人を上位群、平均値未満の人を下位群として選択し、ＳＥ得点と共感性得点の両方において上位群に入る人を「ＨＨ群」、ＳＥ得点では上位群に入るが共感性得点では下位群に入る人を「ＨＬ群」、ＳＥ得点では下位群に入るが共感性得点では上位群に入る人を「ＬＨ群」、ＳＥ得点、共感性得点の両方において下位群に入る人を「ＬＬ群」として選択した。その結果、ＨＨ群54名、ＨＬ群26名、ＬＨ群33名、ＬＬ群44名となった。

[1]215名を対象に質問紙を配布し、161名の回答が得られた(回収率74.9%)。このうち記入漏れのある４名のデータを除いた。

表４－１　ＳＥ尺度の項目内容と平均、項目－得点相関

項目内容	平均	ＳＤ	r
(1) 私は体格がよい。 ⟷ 私は体格が悪い。	3.2	1.07	.21
2. 私は運動能力が優れている。 ⟷ 私は運動能力が劣っている。	2.9	1.08	.44
3. 私は社交的である。 ⟷ 私は非社交的である。	3.2	1.12	.57
4. 私ははっきりした自分の考えをもっている。 ⟷ 私ははっきりした自分の考えをもっていない。	3.4	1.20	.52
5. 私は敏速である。 ⟷ 私はのろまである。	2.9	0.97	.48
6. 私には親友がいる。 ⟷ 私には親友がいない。	4.1	1.09	.43
7. 私は自分が幸福だと思う。 ⟷ 私は自分が幸福だと思わない。	3.8	1.01	.48
8. 私は異性に人気がある。 ⟷ 私は異性に関心を持たれない。	2.7	0.88	.45
9. 私は努力家である。 ⟷ 私は怠け者である。	2.8	1.15	.33
10. 私には楽しい趣味がある。 ⟷ 私は無趣味である。	3.9	1.22	.46
11. 私は人に信頼される。 ⟷ 私は人に信頼されない。	3.5	0.85	.41
12. 私は自分が世の中のために役に立つ人間であると思う。 ⟷ 私は自分が世の中のために役に立たない人間だと思う。	3.1	0.88	.41
13. 私は人をリードするのが上手である。 ⟷ 私は人をリードするのが下手である。	2.7	1.19	.60
14. 私はいつも活気がある。 ⟷ 私はいつも無気力である。	3.4	0.99	.66
15. 私は正義感に燃えている。 ⟷ 私は事なかれ主義である。	3.2	0.91	.41
16. 私は陽気である。 ⟷ 私は陰気である。	3.6	1.03	.68
17. 私は人前でもあがらない方である。 ⟷ 私は人前だとあがる方である。	2.5	1.13	.36
18. 私は要領がよい。 ⟷ 私は要領がわるい。	2.9	1.23	.52
19. 私は大胆である。 ⟷ 私は臆病である。	2.8	1.08	.55
20. 私は個性的である。 ⟷ 私は個性的でない。	3.4	1.07	.47
21. 私は気持ちがいつも落ち着いている。 ⟷ 私は気持ちに落ち着きがない。	3.0	1.06	.44
22. 私は外向的である。 ⟷ 私は内向的である。	3.0	1.17	.64
23. 私は人に好かれる。 ⟷ 私は人に好かれない。	3.4	0.80	.59
24. 私は自分が好きである。 ⟷ 私は自分が嫌いである。	3.5	1.10	.52
25. 私は野心家である。 ⟷ 私は将来に対して消極的である。	3.3	1.06	.51
26. 私は開放的である。 ⟷ 私は閉鎖的である。	3.3	1.15	.54
27. 私は学校生活を楽しんでいる。 ⟷ 私は学校生活を楽しんでいない。	3.9	1.00	.55
(28) 私は気がきつい。 ⟷ 私は気がやさしい。	3.3	1.09	.19
29. 私は意志が強い。 ⟷ 私は意志が弱い。	3.1	1.15	.52
(30) 私はスタイルがわるい。 ⟷ 私はスタイルがよい。	2.5	1.00	.26
31. 私は手先が器用である。 ⟷ 私は手先が不器用である。	3.2	1.28	.32
32. 私は男（女）らしい。 ⟷ 私は男（女）らしくない。	3.0	0.94	.50
33. 私は計画性がある。 ⟷ 私は計画性がない。	2.8	1.22	.39
34. 私は楽観的である。 ⟷ 私は悲観的である。	3.4	1.20	.43
35. 私は年長者からかわいがられる。 ⟷ 私は年長者からかわいがられない。	3.6	1.00	.42
36. 私は機転がきく。 ⟷ 私は機転がきかない。	3.0	1.05	.57
37. 私は服のセンスがよい。 ⟷ 私は服のセンスが悪い。	2.7	0.97	.44
38. 私は顔がきれいである。 ⟷ 私は顔がきれいでない。	2.8	0.85	.40
39. 私はいい友人が多い。 ⟷ 私はいい友人がいない。	4.3	0.89	.39
40. 私は頭がよい。 ⟷ 私は頭が悪い。	3.1	0.98	.40
41. 私は融通がきく。 ⟷ 私は融通がきかない。	3.1	1.19	.44
42. 私は自分に自信がある。 ⟷ 私は自分に自信がない。	3.0	1.15	.59
(43) 私は決断力がある。 ⟷ 私は優柔不断である。	2.7	1.13	.30
44. 私は行動力がある。 ⟷ 私は行動力がない。	3.0	1.07	.49
45. 私は学習成績がよい。 ⟷ 私は学習成績が悪い。	3.1	1.08	.33

注１　項目番号が（　）で囲まれている項目は、最終項目から削除された項目を表す
注２　ｒはピアソンの積率相関係数

表４－２　共感性尺度の項目内容と平均、項目－得点相関

項　目　内　容	平均	SD	r
1．私は、誰かが悲しんでいるときに、一緒に悲しむことができる。	3.4	1.03	.52
2．私は、人がうれしくて泣くのを見ると、しらけた気持ちになる。(－)	3.8	0.98	.53
3．私は、周りの人が悩んでいても平気でいられる。(－)	3.7	0.90	.59
4．私は、人がどうしてそんなに動揺することがあるのか理解できない。(－)	4.1	0.98	.46
5．私は、人がどういう気持ちでいるかということよりも、その人が何をしたかということの方に関心を持つ。(－)	3.7	1.07	.40
6．私は、他人の涙を見ると、同情的になるよりも、いらだってくる。(－)	4.0	0.90	.62
7．時々私は、他人が問題を抱えているとき、気の毒だと思わないことがある。(－)	3.2	1.07	.42
8．私は誰かが利用されているのを見ると、多少守ってあげたい気持ちになる。	3.8	0.79	.34
9．私は、身寄りのない老人を見ると、かわいそうになる。	4.0	0.87	.49
10．私は、ひとが冷遇されているのを見ると、非常に腹が立つ。	3.9	0.93	.50
(11) 私は、あらゆる問題には必ず両面があると思い、その両方を見ようとしている。	3.7	1.06	.19
(12) 私は、自分で物事を決める前に自分と反対意見の人々の立場を考えようとする。	3.4	1.10	.22
13　時々私は、友人の視点では物事がどのように見えるかを考えてみる。	3.5	0.96	.41
14．私は、大勢の中で一人ぼっちでいる人を見ると、かわいそうになる。	3.7	1.07	.36
15．時々私は、誰かが不当に扱われるのを見ても、それほど同情しない。(－)	3.8	0.90	.62
16．私は、友人が悩み事を話し始めると、話をそらしたくなる。(－)	4.3	0.87	.56
17．私は、不幸な目にあっている人に対して、よく思いやりの気持ちが起こる。	3.6	0.90	.55
(18) 私は、人前もはばからずに愛情を交わす男女を見ると、不愉快になる。(－)	2.9	1.21	.28
19．私は、誰かが喜んでいるときに、一緒に喜ぶことができる。	3.9	0.84	.53
20．私は、他人を批判する前に、その人の立場ならどうかを考えてみようとする。	3.4	1.00	.39
(21) 私は、もし自分が正しいと確信するなら、他人の議論に長く耳をかすことはしない	3.5	1.09	.23
22．私は、動物が苦しんでいるのを見ると、とてもかわいそうになる。	4.1	0.98	.45
23．私は、不幸な状況にある人が同情を求めるのを見ると、いやな気分になる。(－)	3.3	0.92	.36
(24) 時々私は、他の人の立場で物事を考えるのは難しいと思う。(－)	2.2	1.19	.20
25．私は、映画を見てて、周りの人の泣き声やすすりあげる声を聞くと、おかしくなることがある。(－)	3.9	1.01	.52
26．私は、人の気持ちをあれこれ考えても仕方がないと思う。(－)	4.1	1.01	.41

注１　項目番号が（　）で囲まれている項目は、最終項目から削除された項目を表す
注２　ｒはピアソンの積率相関係数

④Ｐ－Ｆスタディの採点

Ｐ－Ｆスタディの反応語の内容は、正規の分類に従って、攻撃の方向と反応の型の二つの観点から分類され、記号化された（表4-3 ）。採点は、ほぼマニュアル通りに行われたが、被調査者によってはＵ反応（スコアリング不能の反応）とみなされる反応があることを考慮して、各スコアの得点にはすべて％値[1] を用いることにした。

表　４－３　Ｐ－Ｆスタディの各スコアの説明
評点因子一覧表

アグレッションの方向 ＼ 反応の型		障害優位型（Ｏ－Ｄ）(Obstacle-Dominance)	自我防衛型（Ｅ－Ｄ）(Ego-Defense)(Etho-Defense)	要求固執型（Ｎ－Ｐ）(Need-Persistence)
他責的 Extraaggression	Ｅ－Ａ	Ｅ’（他責逡巡反応）(Extrapeditive) 欲求不満を起こさせた障害の指摘の強調にとどめる反応 「チェ！」「なんだつまらない！」といった欲求不満をきたしたことの失望や表明もこの反応語に含まれる。	Ｅ（他罰反応）(Extrapunitive) とがめ、敵意などが環境の中の人や物に直接向けられる反応。 Ｅ：これはＥ反応の変型であって、負わされた責めに対して、自分には責任がないと否認する反応。	ｅ（他責固執反応）(Extrapersitive) 欲求不満の解決をはかるために他の人が何らかの行動をしてくれることを強く期待する反応。
自責的 Intraaggression	Ｉ－Ａ	Ｉ’（自責逡巡反応）(Intropeditive) 欲求不満を起こさせた障害の指摘は内にとどめる反応。 多くの場合失望を外にあらわさず不満を抑えて表明しない。内にこもる形をとる。外からみると欲求不満の存在の否定と思われるような反応である。従って失望や不満を抱いていることも外にあらわさないためにかえって障害の存在が自分にとっては有益なものであるといった形の反応語もこれであるし、他の人に欲求不満をひき起させそのためにたいへん驚き当惑を示すような反応もこれに入る。	Ｉ（自罰反応）(Intropunitive) とがめや非難が自分自身に向けられ、自責・自己非難の形をとる反応。 Ｉ：これはＩ反応の変型であって、一応自分の罰は認めるが、避け得なかった環境に言及して本質的には失敗を認めない反応。多くの場合言い訳の形をとる。	ｉ（自責固執反応）(Intropersitive) 欲求不満の解決をはかるために自分自ら努力をしたり、あるいは、罪償感から賠償とか罪滅ぼしを申出たりする反応。
無責的 Imaggression	Ｍ－Ａ	Ｍ’（無責逡巡反応）(Impeditive) 欲求不満を引き起こさせた障害の指摘に最小限度にとどめられ、時には障害の存在を否定するような反応。	Ｍ（無罰反応）(Impunitive) 欲求不満を引き起したことに対する非難を全く回避し、ある時にはその場面は不可避的なものと見なして欲求不満を起こさせた人物を許す反応。	ｍ（無責固執反応）(Impersitive) 時の経過とか、普通に予期される事態や環境が欲求不満の解決をもたらすだろうといった期待が表現される反応。忍耐するとか、規則習慣に従うとかの形をとることが特徴的である。

注：自我防衛型（Ｅ－Ｄ）のところに、今回ローゼンツアイクは(Etho-Defense)という語をつけ加えた理由について、林宛の手紙の中で「私は自我に関係づけられた行為(ego-related action)のかわりにethologyという語を思いついたのもなければ、持ち出したわけでもない。私はethos のように行動の体制化に関連しているという理由により、ego の代替としてethosの接頭辞を採用した。 したがって強調すべきは行動についてであって、仮説上のegoの想像された人格構造についてではありません」と延べている。

＜その他のスコア＞

ＧＣＲ　どの程度に世間並の常識的な方法で適応できるかを示す指標。

Ｅ－Ａ　Ｅ’、Ｅ、ｅの反応数の合計。欲求不満の原因を他人とか環境のせいにする反応をする傾向を示す。

Ｉ－Ａ　Ｉ’、Ｉ、ｉの反応数の合計。欲求不満の原因を自分の責任に帰す反応をする傾向を示す。

Ｍ－Ａ　Ｍ’、Ｍ、ｍの反応数の合計。欲求不満の原因を他人にも自分にも求めず、不可避の事態であったと考える傾向を示す。

Ｏ－Ｄ　Ｅ’、Ｉ’、Ｍ’ の反応数の合計。障害の指摘をするにとどまって率直に自我を表明しようとしない傾向を示す。

Ｅ－Ｄ　Ｅ、Ｉ、Ｍの反応数の合計。ストレスを解消するために率直に自我を強調する傾向を示す。

Ｎ－Ｐ　ｅ、ｉ、ｍの反応数の合計。建設的を解決を図るために欲求に固執した反応。

Ｅ＋Ｉ　他者の非難や詰問に対して自我を主張し、自分を積極的に守る傾向を示す。

Ｅ＋Ｅ　素朴な攻撃傾向を示す。

Ｉ－Ｉ　自責、自己非難の気持ちの強さを示す。

（Ｍ－Ａ）＋Ｉ　自他を許容し、弁護する傾向を示す。

[1]粗点／（24（総場面数）－Ｕ反応の数）×100

V　結果

V－1　被調査者全体のP－Fスタディの結果

P－Fスタディの各スコアに関して、被調査者全体の平均値を算出し、大学生における標準と比較したところ、概して標準的な値であった。(表5-1)。ただし、I－Iの値はやや高く、N－Pの値はやや低かった。

V－2　各群におけるP－Fスタディの結果

各群におけるP－Fスタディの各スコアの平均値を算出し（表 5-1）、さらに被調査者全体のP－Fスタディの各スコアがほぼ標準的な値であったのをふまえて、平均値から逸脱している度合いが分かりやすいように、Z得点[1] による各群の平均値を算出した（表5-2)。そして、P－Fスタディの各スコアにおける4群の平均値を比較するために、Self- esteem (H,L)×共感性 (H,L)の2要因分散分析を行った。その結果、Self-esteemの主効果はまったく認められなかったが、共感性の主効果と交互作用がいくつかのスコアにおいて認められた。

交互作用か有意になったのは、e（F(1,153)

表5－1　P－Fスタディの各スコア（%）における各群および被験者全体の平均値

P-Fスタディ	自己評価×共感性によるグループ				全体(N=157)	大学生の標準
	HH(N=54)	HL(N=26)	LH(N=33)	LL(N=44)		
GCR	56.1 (14.73)	58.4 (15.74)	62.0 (14.67)	56.7 (16.41)	57.9 (15.39)	59.6 (14.4)
E	15.1 (7.74)	15.6 (7.67)	16.5 (7.32)	16.9 (8.18)	16.0 (7.74)	14.0 (7.9)
E'	16.7 (9.05)	21.8 (9.25)	16.9 (6.75)	17.6 (11.45)	17.8 (9.50)	18.6 (10.9)
e	4.6 (3.80)	7.0 (5.06)	4.8 (4.29)	4.4 (3.69)	5.0 (4.17)	5.8 (4.7)
I'	9.2 (4.33)	8.7 (4.91)	9.7 (3.63)	10.3 (4.03)	9.5 (4.21)	9.6 (4.7)
I	15.5 (6.12)	14.4 (6.20)	15.5 (5.19)	16.0 (5.47)	15.4 (5.74)	12.9 (6.3)
i	8.7 (5.81)	6.7 (7.04)	7.2 (6.25)	6.5 (5.92)	7.4 (6.16)	8.8 (6.3)
M	6.7 (5.26)	6.7 (6.16)	5.6 (4.55)	6.9 (5.79)	6.5 (5.41)	5.9 (4.4)
M'	14.9 (5.41)	12.6 (6.54)	14.4 (6.02)	13.3 (6.61)	14.0 (6.09)	14.4 (6.4)
m	9.0 (6.07)	7.7 (6.26)	10.7 (6.60)	9.0 (4.10)	9.2 (5.76)	10.0 (5.5)
O－D	30.3 (10.95)	31.0 (11.66)	31.8 (7.24)	33.9 (9.81)	31.7 (10.09)	29.5 (10.4)
E－D	47.2 (10.73)	49.1 (11.53)	46.8 (8.69)	46.7 (10.68)	47.3 (10.39)	46.1 (10.6)
N－P	22.1 (9.13)	19.8 (11.10)	21.5 (7.81)	19.3 (8.29)	20.8 (9.00)	24.5 (10.8)
E－A	36.4 (12.41)	44.5 (9.66)	38.1 (9.78)	38.8 (12.51)	38.8 (11.73)	38.4 (12.2)
I－A	33.2 (7.15)	28.8 (6.39)	31.9 (7.28)	32.1 (6.51)	31.9 (6.98)	31.5 (7.2)
M－A	30.4 (9.04)	26.9 (7.93)	29.9 (8.45)	29.4 (8.22)	29.5 (8.52)	30.3 (8.6)
E̲	2.7 (3.01)	1.7 (2.17)	2.6 (2.96)	2.4 (3.20)	2.5 (2.93)	2.0 (2.8)
I̲	3.9 (3.68)	4.4 (4.65)	3.7 (3.90)	3.2 (3.17)	3.8 (3.76)	5.1 (4.2)
E̲＋I̲	6.7 (4.29)	6.2 (5.19)	6.4 (5.33)	5.7 (4.77)	6.3 (4.78)	7.4 (5.2)
E－E̲	13.9 (8.67)	20.1 (8.87)	14.3 (7.89)	15.1 (12.01)	15.3 (9.77)	16.3 (10.8)
I－I̲	11.4 (5.61)	9.8 (5.49)	11.6 (5.10)	12.7 (6.47)	11.5 (5.77)	7.7 (5.9)
(M－A)＋I̲	34.6 (10.15)	30.7 (10.28)	33.9 (9.34)	32.5 (9.28)	33.2 (9.77)	35.6 (9.2)

注1　（　）内は標準偏差
注2　大学生の標準の値は、「日本版ローゼンツァイクP－Fスタディ解説　1987年版」（三京房）のデータをもとにして、筆者が算出した。

[1] Z＝(得点－平均)／標準偏差×10＋50

表５－２　Ｐ－Ｆスタディの各スコア（Ｚ得点；％）における各群の平均値と分散分析の結果

P-Fスタディ	自己評価×共感性によるグループ				分散分析		
	ＨＨ(N=54)	ＨＬ(N=26)	ＬＨ(N=33)	ＬＬ(N=44)	ＳＥ	共感	交互作用
ＧＣＲ	48.8 (9.57)	50.3 (10.22)	52.7 (9.53)	49.2 (10.66)			
Ｅ	48.8 (10.01)	49.5 (9.92)	50.6 (9.47)	51.2 (10.57)			
Ｅ'	48.8 (9.52)	54.2 (9.73)	49.0 (7.11)	49.7 (12.05)		＋	
e	49.1 (9.13)	54.8 (12.14)	49.5 (10.29)	48.6 (8.86)			＊
Ｉ'	49.3 (10.29)	48.1 (11.67)	50.3 (8.62)	51.8 (9.58)			
Ｉ	50.1 (10.66)	48.2 (10.81)	50.1 (9.04)	50.9 (9.54)			
i	52.0 (9.43)	48.8 (11.42)	49.7 (10.14)	48.4 (9.61)			
Ｍ	50.4 (9.73)	50.4 (11.39)	48.3 (8.41)	50.6 (10.72)			
Ｍ'	51.5 (8.88)	47.8 (10.75)	50.7 (9.89)	48.9 (10.86)			
m	49.7 (10.53)	47.5 (10.86)	52.7 (11.45)	49.8 (7.10)			
Ｏ－Ｄ	48.6 (10.85)	49.3 (11.55)	50.1 (7.17)	52.1 (9.71)			
Ｅ－Ｄ	49.9 (10.32)	51.8 (11.09)	49.5 (8.36)	49.5 (10.27)			
Ｎ－Ｐ	51.4 (10.15)	48.9 (12.33)	50.8 (8.68)	48.4 (9.22)		＊	＋
Ｅ－Ａ	47.9 (10.58)	54.9 (8.24)	49.4 (8.34)	50.0 (10.66)		＋	＊
Ｉ－Ａ	51.9 (10.25)	45.6 (9.15)	50.0 (10.44)	50.3 (9.33)			
Ｍ－Ａ	51.1 (10.61)	46.9 (9.31)	50.5 (9.91)	50.0 (9.64)			
Ｅ	51.0 (10.28)	47.4 (7.40)	50.5 (10.10)	49.9 (10.93)			
Ｉ	50.4 (9.80)	51.7 (12.37)	49.9 (10.35)	48.5 (8.43)			
Ｅ＋Ｉ	51.0 (8.98)	49.7 (10.86)	50.2 (11.15)	48.8 (9.98)			
Ｅ－Ｅ	48.5 (8.88)	54.9 (9.08)	48.9 (8.07)	49.7 (12.30)		＊	＋
Ｉ－Ｉ	49.7 (9.73)	47.0 (9.52)	50.2 (8.84)	52.0 (11.21)			
(Ｍ－Ａ)＋Ｉ	51.4 (10.38)	47.4 (10.52)	50.7 (9.56)	49.2 (9.49)			

注１　（　）内は標準偏差
注２　＋…ｐ＜.10　＊…ｐ＜.05

＝4.11, ｐ＜.05)とＩ－Ａ（F(1,153)＝4.19, ｐ＜.05)であり、Ｅ－ＡとＥ－Ｅにおいても同様の傾向（ｐ＜.10)が見られた（図5-1)。下位検定によってさらに詳しく調べてみたところ、ｅにおいては、Self-esteem の低い群では共感性の効果は認められなかった（F(1,75)＝0.16, n.s.）が、Self-esteem の高い群では、共感性の効果が有意になった（F(1,78)＝5.58, ｐ＜.05)また、Ｉ－Ａにおいても同様に、Self-esteem の低い群では共感性の効果は認められなかった（F(1,75)＝0.03, n.s.）が、Self-esteem の高い群では共感性の効果が有意になった（F(1,78)＝7.15, ｐ＜.10)。この結果は、Self-esteem の低い人達の間では、共感性の違いによって、他責的反応や自責的反応をする傾向が大きく違うことはないが、Self-esteem の高い人達においては、共感性の高い人（ＨＨ群）に比べて共感性の低い人（ＨＬ群）は自責的反応が少なく、逆に他責的反応が多いということになる。しかも他責的な反応の中でも特に、あからさまに相手を避難し（他罰)、他者に事態の解決を要求する（他責固執反応）といった反応が、共感性の低い人（ＨＬ群）の方が多いということを示す。

また、図5-1が示すように、これらの傾向は、

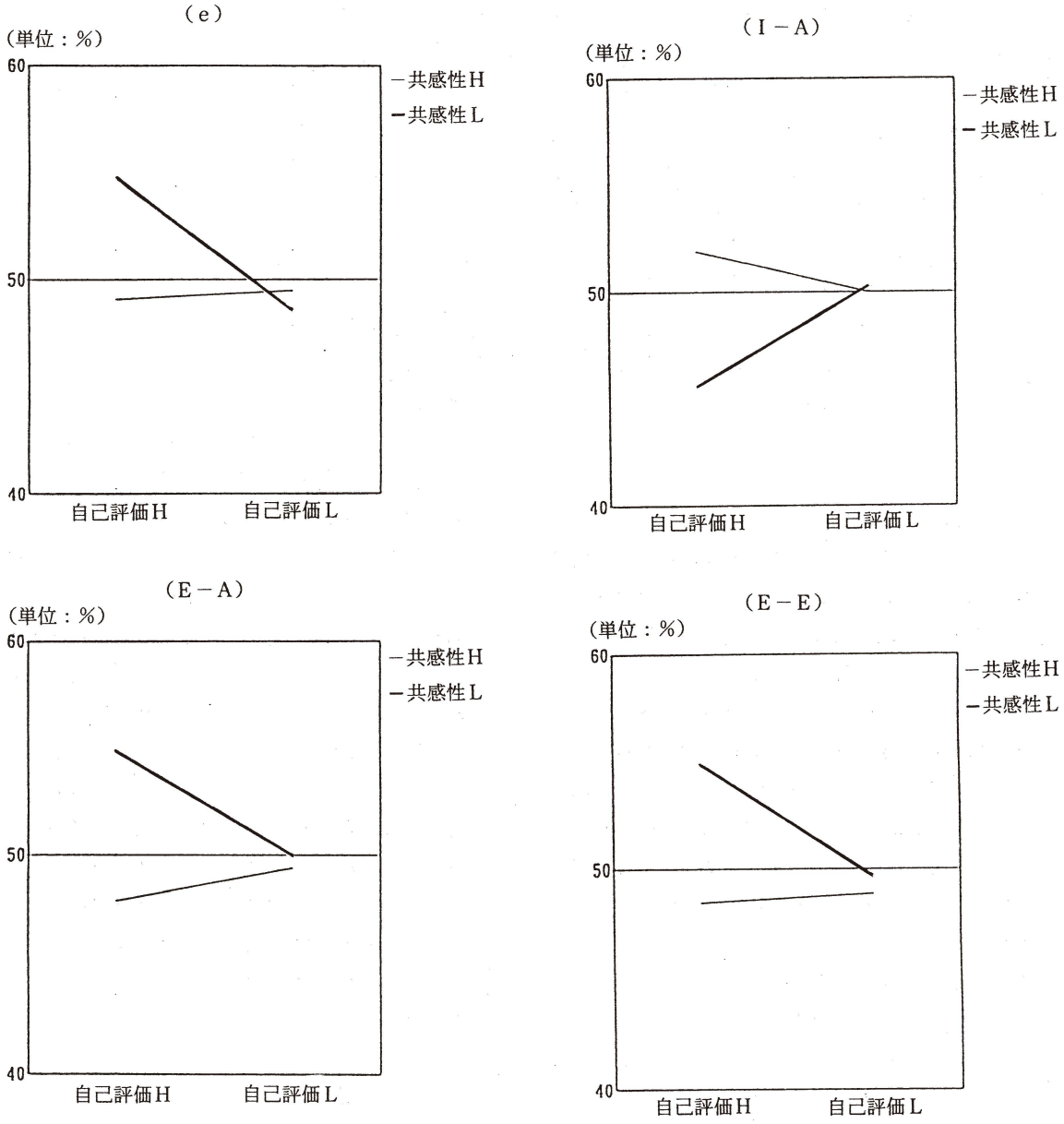


図５－１　交互作用が有意なスコアおよび交互作用の傾向とみられるスコアにおける各群の平均（Ｚ得点）

上段：交互作用の有意な（$p < .05$）スコア

下段：交互作用の傾向（$p < .10$）のみられたスコア

４群の中でＨＬ群のスコアが平均から大きく逸脱していることによって生じていると言える。

一方、共感性の主効果が有意になったのは、Ｅ－Ａ（$F(1,153)=5.07$, $p<.05$）とＥ－Ｅ（$F(1,153)=4.56$, $p<.05$）であり、また、ＥとＩ－Ａにおいても同様の傾向（$p<.10$）が見られた。これは、共感性の低い人のほうが、他責的な反応、特にあからさまに他者を非難、叱責する攻撃的な反応が多く見られるということを示す。しかしながら、平均値を見る限りでは、こうした傾向は、Self-esteem の高低にかかわらず言えることというよりは、ＨＬ群の反応数が多かったり少なかったりすることの影響を強く受けたものと考えられる。

Ⅵ　考察

Ｐ－Ｆスタディにおいて、４群の中でＨＬ群の反応は、平均的な反応パターンからの逸脱が大きく、全般的に他責的傾向が強く自責的傾向が弱いという傾向が見られた。つまり、Self-esteem が高く共感性の低い人は、対人葛藤によって自己愛が危機にさらされると、平均的に期待されるよりも、その事態が生じたのを他人のせいにして、自分の過失は認めないという態度に出ることが多いということだが、このことは、問題のところで述べた、「誇大自己が自己の限界を認めようとせず、その失敗や弱さを十分に援助してくれない蒼古的な自己対象の悪意や堕落のせいにする」という事態への近さを感じさせる。

また、他責的な反応の中では、相手をあからさまに非難、叱責する他罰反応や相手に事態の解決を要求する他責固執反応が多かった。この結果によって、Self-esteem が高く共感性の低い人達が、対人葛藤によって自己愛の傷つきを体験しやすく、その反応として相手に向けるアグレッションの様式が、激しく、執拗で、背後に外傷の埋め合わせや復讐の願望を伴う、自己愛性憤怒に近いものであることが、より一層明らかにされると思われる。

これらのことは、Self-esteem が高く共感性の低い人達においては、人格の統合性やその自己愛的な機能が高くなく、その高いSelf-esteem は、人格の中心部分に十分には統合されていない比較的プリミティブな自己愛によるものであると説明できるような心的布置があることを示唆するように思われる。

一方、ＨＨ群ではどのスコアにおいても、平均的な反応数が見られた。このことは、Self-esteem が高くかつ共感性も高い人は、対人葛藤によって自己愛が危機にさらされる状況において、自己愛的な傷つきやすさを示すことなく、平均的に期待される反応をするということを意味すると考えられる。しかし、このことはそればかりでなく、Kohut(1987/ Elson)が精神の健康の指標として挙げる「その人が自由に使えるポジションの多様性」「応答の多様性」を意味するものとも言えるだろう。つまり、その場の状況に応じて、いろいろ応答のパターンを使いこなせる柔軟性があると言えるだろう。そして、これらのことはSelf-esteem が高くかつ共感性も高い人の基盤にある人格の統合性の高さやその自己愛機能の高さを示唆するものと言えるだろう。

交互作用の見られたスコアにおいて、Self-esteem の高い人達の群に関しては、共感性の違いによって、 以上のような特徴的な差異が見られたが、Self-esteem の低い人達の群では、共感性の違いによって反応傾向に有意な差が見られなかった。このことは、Self- esteemの高い人においては、Self-esteem の低い人においてよりも、共感性と自己愛の危機状態におけるアグレッションの表現様式が密接に関連しているということを示す。さらに、共感性は、Self-esteem の高い人に関しては、その基盤にある人格の統合性や自己愛のありようを推測する上で有効な指標となりうるが、Self-esteem の低い人に関しては必ずしもそうしたことの有効な指標になりえないことを示唆している。結果でも述べた通り、共感性よる主効果が

見られたスコアに関しても各群の平均値を見る限り、ＨＬ群の反応傾向が共感性の主効果に大きな影響を及ぼしていると考えられ、このことからも、Self-esteem の高い人に関しては、その基盤にある人格の統合性や自己愛のありようを推測する上で有効な指標となりうるが、Self-esteem の低い人に関しては必ずしもそうしたことの有効な指標になりえないということが支持されると考えられる。このようなことが生じるのは、本論文の理論的な枠組みから言えば、Self-esteem の高い人においては、より共感性と基底的な人格の統合性や自己愛あり方とが密接に結びついているからとも、より基底的な人格の統合性や自己愛あり方と自己愛の危機的状況におけるアグレッションのあらわれ方とが密接に結びついているからとも、その両方とも言えるが、このことは今回の研究結果から直接的に解答を導くことはできない。

また、Self-esteem の低い人達の群では、共感性の高さに関わりなくスコアがどれも平均的な反応数を示し、傾向としては、Self-esteem が高く共感性が低い人達よりは、Self-esteem も共感性も高い人達の反応傾向に近かったが、このことはSelf-esteem の低い人たちが、共感性に関わりなく、人格の統合性やその自己愛的機能において、Self-esteem も共感性も高い人達と同じくらいの高さをもつということなのであろうか。Kohut (1971) の文脈で考えるならば、Self-esteem が低いという現象は、プリミティブな自己愛的構造（誇大自己）が自己対象のミラーリングによって現実的な低いSelf-esteem に形を変えたという場合と、水平分割によってプリミティブな自己愛を抑圧している場合が考えられるが、後者の場合を考えるならば、垂直分割によってプリミティブな自己愛が人格の中心的な部分から隔てられているよりも、水平分割によってプリミティブな自己愛が抑圧されている場合のほうが、自己愛の均衡が保たれやすく、自己愛性憤怒に近いアグレッションの表現様式が生じにくいということを示唆するのかもしれない。しかし、このことに関しては今後より詳しい検討が求められる。

また、どのスコアに関しても、Self-esteem の主効果が見られなかったが、このことは、交互作用が見られたことを考慮に入れるならば、対人葛藤によって自己愛が危機にさらされたときの、自己愛的な傷つきやすさやアグレッションの表現様式については、Self-esteem の高さという観点からのみでは、十分にとらえることはできず、その基盤にある人格の統合性や自己愛のあり様にまで目を向けてはじめて明瞭に浮かびあがってくるということを示唆していると考えられる。

Ⅶ　おわりに

本論文では、主にKohut, H. の自己愛論から、Self-esteem に関してその基底にある人格構造のあり方を視野に入れての検討を試みた。今回の研究では、共感性を人格の統合性やその自己愛的機能の指標として用いたが、その有効性は、Self-esteem の高い人達において、共感性の違いによってフラストレーション状況でのアグレッションの表現様式が異なることで示された。今回の研究に関連して、理論的な文脈からいくつかの示唆が得られたが、仮説の提案にとどまっており、今後さらなる実証的研究あるいは臨床的検討が求められる。

参考文献

Elson, M. (Ed.) 1987　The Kohut seminors.
（伊藤洸　監訳　コフート自己心理学セミナー Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ　金剛出版，1987，1990，1992）

藤原正博・前田重治 1977　Self-esteem に関する臨床心理学研究－境界線領域におけるロールシャッハ・テストとの関係を中心として　九州大学教育学部紀要（教育心理学部門），21, 2, 27-45.

角田　豊 1984　共感性についての研究－映像と質問紙を用いて京都大学教育学部卒業論文（未公刊）

加藤隆雅・高木秀明　1980　情動的共感性の特質　筑波大学心理学研究，2,33-42.

Kohut,H. 1966　Forms and transformations of narcissism. Ornstein,P.H.（Ed）The Serch for the Self:Selected Writings of Heinz Kohut:1950-1978,Chapter 32.International Universities Press.（伊藤洸　監訳　コフート入門　岩崎学術出版社，東京，1987所収）

Kohut,H. 1968　The psychoanalytic treatment of narcissistic personality disorders: Outline of a systematic approach. The Search for the Self,Chapter34.

Kohut,H. 1971　The Analysis of the Self. International University Press,New York.（水野信義・笠原嘉　監訳　自己の分析　みすず書房，東京，1994）

Kohut,H. 1972　Thoughts on narcissism and narcissistic rage. Strozier,C.B.(Ed.) Self Psychology and the Humanities:Reflections on a New Psychoanalytic Approach,Chpter4. W.W. Norton&Company,New York.（林直樹訳　自己心理学とヒューマニティ　金剛出版，1996所収）

Kohut,H. 1977　The restoration of the Self. International University Press,New York.（本城秀次・笠原嘉　監訳　自己の修復　みすず書房，東京，1995）

Kohut,H.&Wolf,E.S. 1978　The Disorders of the Self and their Treatment:An Outline. International Jornal of Psycho-analysis 59, 413-425.

Kohut,H. 1984　How does analysis cure? University of Chicago Press,Chicago.（本城秀次・笠原嘉　監訳　自己の治癒　みすず書房，東京，1995）

丸田俊彦　1982　Kohutの自己（self）心理学　精神分析研究，26,1,21-29.

Maslow,A.H. 1954　Motivation and Personality. Haper&Row.

斎藤久美子　1959　自己意識の分析による人格適応性の一研究　心理学研究，30,277-285.

斎藤久美子　1962　ロールシャッハ・テストと一質問紙（自己評価法）による適応の研究　ロールシャッハ研究，5,66-86.

斎藤久美子　1969　ロールシャッハ反応と自己評価の対応性について　ロールシャッハ研究，11,121-138.

Stolorow,R.D. 1975　Toward a functional definition of narcissism. International Jornal of Psycoanalysis, 56,179-185.

菅佐和子　1975　Self-Esteem と対他者関係に関する一研究－青年期を対象として　教育心理学研究，23,224-229.

住田勝美他編　1987　日本版ローゼンツアイクＰ－Ｆスタディ解説－基本手引－　1987年版（成人用・児童用・青年用）　三京房

ABSTRACT

A Study on Self-esteem in Terms of Narcissism

SAKATA, Hiroyuki
Konan University

The purpose of this study was to examine self-esteem considering psychic structures in the backgraund in terms of narcissism. The theorv on narcissism in this study mainly depended on that of Heinz Kohut. Taking some cases of narcissistic personality disorders into consideration, it could be understood that high self-esteem was not always based on highly integrated personality, but also based on relatively primitive narcissism which wasn't fully integrated into the central personality structure. It was supposed that the level of integration of narcissism was measured by empathy, because narcissism transforms developmentally into empathy in the Kohut's theory. Validity of this hypothesis was investigated by the expression forms of aggression at the crisis of narcissistic injury. Subjects were 157 college students. Self-esteem and empathy were measured by inventory scales, and expression forms of aggression was investigated by P-F study of Rosenzweig. The investigation showed that persons with high self-esteem and low empathy expressed their aggression in the form similar to "narcissistic rage". This suggested it was effective that the perspecfive of narcissism was added to the study on self-esteem.

Key words: self-esteem, narcissism, empathy, aggression, narcissistic rage